



進路とは生き方そのもの。 大学合格をゴールとせず、 生徒の「未来」をつくっていきたい

積極的に高大連携を進め 生徒が知らなかった世界を見せる

本校が目指すのは、自ら学び、考え、行動し、社会に貢献できる人を育てることです。そのため、大学合格をゴールにはしていません。国公立大学の合格者数は、昨年、一昨年は80名を超えましたが、年によってばらつきがあります。そのなかには、難関国立大学に合格する力がありながら、「将来、自分はどうかしたいのか」を原点に考え、あえて首都圏の私立大学を選ぶ生徒もいます。本人にとって何がベストなのか。何より本人の意思を尊重し、教員が日常的な面談を通して一緒に考える姿勢を大切にしています。学校として進学実績を高めたい思いはありますが、進路選択とは生き方の選択である、というのが本校の共通理解です。高校3年間は、その後の人生に影響する貴重な体験の時期です。幸い学校生活における生徒からの満足度は非常に高く、進学先からも「北海出身の学生は最後までやり抜く強い気持ちをもっている学生が多い」という評価をいただいています。

私自身、進路指導に関わるなかで、以前は道内大学で進路が完結する生徒が多く、

経済的な理由だけでなく、そもそも外の世界を知らないことも課題だと感じていました。そこで進路指導部長になった年、全国各地の評価の高い大学に働きかけ、毎年10を超える大学・学部から研究者を招き、1年生全員を対象に出前授業を実施しました。未知の学問に触れることで、生徒が「まだこんなに選択肢がある」と気づき、教員も知見を深める機会となりました。生徒の率直な感想レポートをすべて大学に送ったことも大学から評価され、その後の信頼関係や指定校推薦枠の増加につながりました。今では道外私大への進学者も常に100名を超えています。現在は、こうしたつながりを基礎に、首都圏の大学との高大連携協定も進んでいます。

コースや部活動に関係なく 互いを認め、切磋琢磨する空気

本校では、探究活動も大学との連携を軸に進めています。1年次は併設される北海学園大学と連携し、そもそも探究とは何か、課題発見やデータの扱い方など、大学での学びを意識した探究を年間計画で実施。2年次は40年近く続く沖縄修学旅行を軸に、法政大学沖縄文化研究所と連携し、探究の幅と深

さを追求しプレゼン力を養っています。また、特進Sクラスでは、データサイエンスを活用して硬式野球部の競技力向上を目指す北海高校ならではの特別探究も始動しました。今後、学びと部活動のさらなる相乗効果に期待しています。このように本校では、コースや部活動の垣根を越えて、互いに応援し合う文化があります。昨年度、共通テストを翌日に控えた約100名の生徒に学年集会が開かれた際、進路を決めていた3年生が全員集まり、サプライズでエールが送られました。甲子園などの全国大会に出場した者が「今度は自分たちが受験生を応援する番だ」という言葉が印象に残っています。互いを認め、切磋琢磨しながら、挑戦する仲間を応援する。その文化が本校の大きな財産だと思っています。

あきやま・しゅうじ／1965年生まれ。北海学園大学法学部卒業後、母校の地歴科教員に。写真部の指導では全国優勝も。長く進路指導部に所属し、率先して高大連携に注力。1999年、共学化で医療系志望者が増えた際、看護・医療系大学に足を運び、直接大学生に学ぶ機会を得たいと依頼したことも。2019年、校長に就任。「私学である本校の教職員は誰もが学校経営の当事者という意識をもつことが必要。少子化が進むなか、将来を見通した組織運営と時代を先取りしたカリキュラムの再編など成すべき課題が多いがブランド力向上に努めたい」と話す。